



九十二歳の女性。この女性を、彼女と呼ぶことにします。彼女は、息子さんと二人暮らしで、介護は近所に住むめいの方がされていました。

三月、彼女が「こげやすくなった。これまで畑に行っていたのにできなくなつた」とのことので往診を始めました。最初の往診時に、貧血があり、手足は紫色で、便に出血がありました。認知症に加え、直腸がんによる貧血・心不全が予想されました。

病院はいやだ

「ご家族に、病院に入院して、ちゃんと検査を受けた方がいいことをお話ししました。しかし病院には行けないと断られ、そ

住民の暮らしを支えて往診

れならせめて診療所に一度来てくださいと話し、社会福祉協議会

の車で送迎してもらいました。診療所ですら検査をしたところ、やはり末期のガンと考えられました。家族一同の意見として、病院への入院は全く考え

ていないとこのことを確認し、診療所からの訪問診療を行うことにしました。幸い、薬によって心不全と貧血はよくなり、畑の草むしりを始めました。認知症の症状もよくなり、デイサービスに通うこともできました。定期的に訪問することを、このほか楽しみにしてもらっていたので、診療所から家までは遠かったのですが訪問しがいがありました。

はたの 畑野 ひでき 秀樹 12期生1989年卒



伊吹山山頂を彩るシモツケソウ。8月上旬にピークを迎える。この花を見ると、第2の故郷、栃木県を思い出す

地域医療振興協会・地域包括ケアセンターいぶき

【私の勤務地】地域包括ケアセンターいぶきは、滋賀県米原市(人口4万人)の山間部に位置し、2006年4月にオープンした医療と福祉の複合施設である。診療所・リハビリテーション施設・訪問看護ステーション・通所リハビリ・老人保健施設・短期入所施設を併設している。

生きていたい

しかし四カ月目。七月に入ると「どうしたらえんやー、助けてくれー」と錯乱状態が出現し、再び寝たきり状態になってしまいました。

九月に入ると、痛みが出だし、痛み止めを使いだしました。稲刈りの時季に、もう一度、車いすに乗せて外の世界を見てもらいました。そして、これが最後のシャバの世界に。程なく、苦しい様子もなく、安らかに昇天されました。

お盆の訪問の時、「わしゃ、もつとシャバにいたい。助けてほしいんじや。徳を積んだらよくなるんなら何でもしたい」。認知症があるため理解し

余命をどこで過ごすか、選択肢はいろいろとできてきました。住民にとって、自宅での生活を希望され、介護する家族にも受け入れられるものであるならば、できる限りその願いをかなえてあげたいと思い、往診を続けているこのころです。

(次回予定は兵庫県)